サルトルと心の哲学

― マインド・リーディングの批判 ―

柴　田　健　志

「人間という人間が、それぞれお互い同士に対して、そんなにも深い深淵であり、秘密であるようにできているということは、考えてみれば実に驚くべきことである」

ディケンズ『二都物語』

はじめに

他者理解がどのように成立しているかという理論的関心は、今日では、哲学や心理学のみならず、ニューロサイエンスや認知科学等の分野において広く共有されている。これらにおいて主流派を形成している傾向は他者理解を「マインド・リーディング」の問題とみなす傾向である。「マインド・リーディング」とは、本人以外には直接認識できない他者の心の状態（意図、信念、欲求等）を外的な情報から読み取って認識することを意味する。

この論文において私は「マインド・リーディング」という考えを端的に批判するつもりである。批判の趣旨は、他者理解とは他者の心を解読することであるという考えが誤謬にほかならないという点の指摘に尽きている。それが誤謬であることを明確にするという目的で私は二つの主張を展開するつもりである。

（1）他者理解が「マインド・リーディング」によってなされるという想定は他者の存在の超越性が誤って受け取られることに起因している。

（2）他者理解は「マインド・リーディング」によってではなく直接的な知覚によって成立している。

（1）（2）はまったく別々の主張であるように見えるかもしれない。しかし、これらはじつは関連している。他者の存在の超越性を認めるということは、それが「マインド・リーディング」などによっては到達することのできないものであるという点を認めるということを意味している。言い換えれば、他者の主観を第三者が認識することなど不可能であることを認めるということを意味している。ところが、事実としてわれわれは他者を何らかの仕方で理解し、相互にコミュケーションをとることが可能である。すると、他者理解とは認識というよりもむしろプラグマティックな状況の中での知覚によって成立しているという視点がとる必要が生じてくる。このような観点をとらず、他者理解とは他者の主観についての理解であると考えるならば、そこから「マインド・リーディング」による他者理解という結論が出てくるのである。

しかし、私の考えによれば、「マインド・リーディング」とは、他者の主観という超越的な存在をたかだか直接的に知覚することが不可能な隠された対象という地位に引き下げた上で、それは推論によってなら認識しうるという発想から出てきたものにすぎない。このようないわば中途半端な観点をとることによって、他者の超越性という形而上学的な次元と

プラグマティックな状況の中での知覚による他者理解という現実的な次元をともに取り逃がしているのである[一]。

（1）（2）の主張は、サルトルの『存在と無』にもとづいている。関連するテキストは、（1）は哲学史上名高い「眼差」に関するテキストであり、また（2）はそれに続く身体論である。他者理解に関する現在の主流派理論が共通の前提とする「マインド・リーディング」という誤謬を攻撃することを目標にして、この連続する二つのテキストを読解しなければならない。

1　「マインド・リーディング」の二つの理論

マインド・リーディングと偽信念課題

他者理解に関する現在の論争を整理すると、他者理解とは「マインド・リーディング」であるという前提の下に二つの主要な理論が争っているという状況が見えてくる。一つは「理論理論」、もう一つは「シミュレーション理論」と称する理論である。

これらの理論は相互に対立しているが、ひとつの前提を共有している。他者理解とは外から観察することが不可能なその心の状態を理解することであるという前提である。観察不可能であるにもかかわらず他者理解が事実として成立している以上、その理解は何らかの推論にもとづいて成立しているのでなければならないと考えられる。この点も両者に共通である。他者理解とは基本的に「マインド・リーディング」であると見なされているのである。したがって、「理論理論」と「シミュレーション理論」の対立は「マインド・リーディング」の方式に関する対立であるといってよい[二]。

「理論理論」は、他者を理解するときわれわれは理論的な態度をとっていると主張している。他者の心の状態（意図、信念、欲求等）という観察不可能な存在に言及するということは、観察可能なデータ（身体所作、顔の表情等）に理論的な解釈を加えることにほかならない。そのような理論は「心の理論（theory of mind: ToM）」と呼ばれている。科学者が物理理論によって自然を解釈するように、われわれもまた「心の理論」によって他者を解釈しているという発想である。このような発想はルイスの「機能主義」の哲学に原点を持っていると考えられるが、発達心理学を中心にこの発想が広まったきっかけはプレマック&ウッドラフが一九七八年に発表した論文「チンパンジーには心の理論があるか」である。この論文では、他者理解が理論的活動にほかならない点が明言されている。

「ある個体が自己および他者に心の状態を帰属させているとするならば、彼は心の理論を持っている。この種の推論のシステムが理論として理解されるということは次のような理由からして当然のことである。すなわちそれらの状態〔心の状態〕が直接的には観察できず、またそのシステム〔推論のシステム〕は他者の行動を予測するために用いられることができるという点においてである」(三)。

このように、推論の目標が観察不可能な対象であるという点ならびに推論によって未来の予測が可能であるという点、この二点を根拠にして他者理解において機能していると考えられる「推論のシステム」は理論であると明言されている。この主張に科学との類比という発想を読み取ることは困難ではあるまい。上で指摘したようにこの考えは発達心理学の研究において急速に普及していくことになる。関心の中心はいったい幼児がいつから心の理論を駆使できるようになるかという点である。

この点を実証するためにデザインされた「偽信念課題（false-belief task）」は、他者の行為を予測する能力を心の理論を駆使していることのメルクマールとみなし、その能力をテストするための課題である。それは次のように行われる。――サリーは自分のおはじきがバスケットの中にあると信じているが実際にはそれは箱の中にある（サリーが不在の時、アンが箱の中に移動させた）。被験者である子供はこの状況をイラストによって示される。そこで問題は、おはじきで遊ぼうと思ったサリーはどこを探すでしょうか、というものである[四]。このように、この課題は誤った信念を持った他者がそれにもとづいてどのような行動をとるかを予測する能力を検査するものである。驚くべきことは、四歳から五歳以上の健常児のほとんどがこの課題に合格するのに対し、この年齢未満の健常児のほとんどは逆に不合格となるという結果である。四歳から五歳未満の健常児のほとんどが、サリーは箱の方へ行くと答えるのである（ちなみに自閉症の子供は五歳以上でも合格率は極めて低い）。

この結果をどのように解釈すべきであろうか。行為者の心の状態（信念、欲求）を行為の原因とみなせば、それらのあいだには一般法則が想定できる。それが「心の理論」である。この実験の場合、サリーの心の状態は「おはじきはバスケットの中にある」という（誤った）信念および「おはじきで遊びたい」という欲求である。この状態が行為を生み出すという点が理解されていれば、サリーはバスケットの中におはじきを探しにいくだろうという行為予測が成り立つはずである。ところが、四歳から五歳未満の健常児のほとんどがこの予測に失敗している。したがって、この結果は、四歳から五歳までは「心の理論」が駆使できないということを意味するものとして解釈されるのである。

ところで、「理論理論」は心の理論による他者理解を他者理解の基本的かつ普遍的な方式とみなす。それゆえ、この結果にしたがえば、この年齢までは他者に心の状態があることを認め、それを前提としてコミュニケーションを図ることができないということになる。しかし、これは明瞭に現実に反するであろう。四歳から五歳未満の幼児とわれわれとの間に

相互理解が成立しているということに疑問の余地はない。このことは、他者理解が成立するにあたっては「心の理論」などよりも基本的な活動があるという可能性を示唆しているはずである。

これに対して、「シミュレーション理論」によれば他者理解はもっと単純な原理にしたがっている。第三者には隠されている他者の心の状態を知るためには他者に似たものをモデルにすればよい。そのモデルは心の状態を見ることのできる透明なモデルでなければならない。では、そのようなモデルは存在するであろか。いうまでもなく、自己自身がそのようなモデルである。「シミュレーション理論」とは、他者の心の状態を自己というモデルを用いて推論するという主張である。やや詳しく言い換えれば、シミュレーションによる他者理解とは、他者が置かれている状況に自分自身を置いてみたときに自分に生じる心の状態の変化をとらえ、それをもとに他者の心の状態を推論するという発想である。すなわち、ここで主張されている「マインド・リーディング」の方式とは、自分があたかも他者本人になったふりをすることにもとづいている。――この状況に置かれたら自分はこう感じる（あるいは考える）であろう、それゆえ彼もそう感じている（あるいは考えている）だろう。このような推論にもとづいて他者の行為を予測することは可能であるはずである。これがシミュレーション理論の主張する他者理解のメカニズムである。

「シミュレーション理論」においても他者理解はやはり一種の解釈である。クワインの「根本的翻訳」に関する議論がシミュレーションにもとづいて組み立てられていることはよく知られているが〔五〕、ここではそれが他者理解の基本的かつ普遍的な方式として主張されているのである。いうまでもなく、この主張は他者理解の基本的な部分が「心の理論」によってなされているという主張への反論である。ロバート・ゴードンが一九八六年に発表した論文「シミュレーションとしての民間心理学」は明瞭にそのような意図で書かれている〔六〕。

ゴードンは先に触れた「偽信念課題」を素材にして「心の理論」への反論を試みている。この課題の実験結果は、四歳

から五歳以上の健常児のほとんどがこの課題に合格するのに対し、この年齢未満の健常児のほとんどは逆に不合格となるというものであった。すでに述べたように、この結果は四歳から五歳未満ではまだ「心の理論」が駆使されていないことの証拠として解釈されてきた。これに対してゴードンは、この実験結果を「シミュレーション理論」を支持する結果として解釈し直しているのである。

ゴードンの主張をまとめると次のようなことになる(七)。他者のふりをするということは、自分とは異なった視点の存在を認めるということを前提している。これに対し、四歳から五歳未満の子供はまだ自己中心性（ピアジェ）をもっており、それゆえ他者の視点から世界を見ることが十分にはできず、ただ自己の視点から見ておはじきは箱の中にあるのだからサリーは箱の方へ行くと答えるのだという実験結果の解釈が成立するのである。すなわち、「心の理論」が駆使できていないのではなく「シミュレーション」ができていないのである。

さらにゴードンは、四歳から五歳以上であっても自閉症の子供はこの課題に合格する率が極めて低い点に注目している(八)。すでに述べたようにシミュレーションとは他者になったふりをするということを意味するが、自閉症の子供には「ごっこ遊び（pretend play）」（あるいは「ふり遊び」）ができないということは臨床的によく知られていることなのである。

このように、「偽信念課題」の実験結果の解釈としては「心の理論」による解釈よりも「シミュレーション」による解釈の方がより納得のいくものであるとゴードンは主張するのである。しかし、かりにそうであったとしても、そのことからして他者理解の基本的かつ普遍的な方式が「シミュレーション」によって構成されていると主張できるであろうか。明らかに無理である。以上から主張しうることは、「偽信念課題」の実験結果については「シミュレーション理論」がより納得のいく解釈を提出しうるということにすぎないからである。あるいは次のように言い換えてもよい。この実験によって検査されるのは他者の行為を予測するという能力である。しかし、そのような能力を他者理解に必要な基本的な能力と

見なすことはできないであろう。というのも、行為が予測できなかったからといって他者を理解していないことにはまったくならないであろうから。

このように、「マインド・リーディング」に関する二つの立場を検討してみると、それらがいずれも他者理解の基本となるべき点を見逃しているのではないかという疑問が浮かび上がってくる。私の考えによれば、それは何ら不思議ではない。他者理解を「マインド・リーディング」としてとらえるという出発点自体にすでに誤りが含まれているからである。したがって、私の課題はこれらの理論の内容を批判することではなく、その前提となる「マインド・リーディング」という誤謬がどのようにして生み出されるかを示すことである。

マインド・リーディングの誤謬

今日「マインド・リーディング」と称される考えは、英語圏の哲学的伝統の中ではすでに半世紀ほど前にギルバート・ライルによって批判されている。ライルが批判したのは、第三者が知覚することのできる身体所作や顔の表情などの原因として心を想定すること自体である。しかし、ライルは心の存在を否定したのではない。心の存在を身体所作等から独立した知覚不可能な存在とみなすことを「カテゴリー・ミステイク」として批判したのである(九)。ライルによれば、心の存在は身体の存在と同等の資格（同一のカテゴリー）において身体とは独立に考えられうるものではなく、身体所作において表現されるものであるにすぎない(十)。つまり、ライルの考えによれば、他者の心は第三者によって知覚されうるのである。こうしてライルは、今日では「マインド・リーディング」と呼ばれる考えが虚偽であり、他者理解はもっと明白な仕方で行われていると主張したのである。

私はライルの主張に何ら異存はない。そこでむしろ、私が試みたいのは、ライルの批判を別の側面から補強することで

ある。他者理解とは第三者には知覚できないその心の状態を外から読み取ることであるという考えを誤りであるとみなす点において、私はライルとまったく同意見である。しかし、注目すべき点は、その考えが誤りであるにしても、その誤りはある種の普遍性を持っているように思われるという点である。他者理解とは第三者が知覚することのできないその心的状態を読み取ることであるという考えは、きわめて広い範囲で共有された考えであるように思われる。

私の考えによれば、「マインド・リーディング」に類した考えが広い範囲で共有される理由は、他者の超越性に関する通俗的理解とでもいいうるものに求めることができる。サルトルを参照しなければならないのはこの点においてである。サルトルの議論の詳細をそのテキストを交えて検討する前に、その要点を述べておくとすればそれは以下のようなことになるであろう。

他者とは、自己とはまったく異なった視点から世界を見出す主観にほかならない。他者の主観が経験する世界を私は何としても経験することができないであろう。彼の「本心」というものがあったとしても、私はそれに指一本触れることはできないはずである。この意味で、他者とは私を超越する存在である。ところがその一方で、他者理解は事実として成立している。そこで、この理解がどのようにして成立しているのかという点が問題になるのは当然であろう。しかし、この問題には次のような困難が含まれている。他者を理解するということは他者を対象として認識するということであるが、他者を対象として認識するということは他者の超越性に関する理解と両立しえないものなのである。

他者の超越性に関する通俗的な理解とはこれらが両立するとみなす誤った考えに起因している。この考えにしたがって他者という決して対象とはなりえないものを対象として認識しようとすれば、到達不可能な他者の主観性はただたんに第三者の知覚からは隠された内面して表象されることになるであろう。すなわち「マインド・リーディング」によって理解できると想定されているのは真実の主観性の影にすぎない。到達不可能という認識が、直接知覚することはできないとい

う認識に格下げされているのである。「マインド・リーディング」によって理解できるとされる他者の心の状態とは身体の背後に想定された幻影である。この意味において、「機械の中の幽霊（The Ghost in the Machine）」（十一）というライルの表現は的を射ている。サルトルを参照しなければならないのは、このような幻影が不可避的に生み出される条件として他者の主観性が対象へと引き下げられるという錯誤が存在しているという点を明確にするためである。

以下においては、他者の超越性に関するサルトルの議論を参照した上で、その超越性が対象へと下落するという現象をやはりサルトルのテキストを参照して考察してみなければならない。

2　他者の超越性とその下落

他者の存在証明

サルトルは他者に関する議論を日常性の分析から始めている。その分析によれば、他者がまさに他者として私の日常生活に現れるのは、私の視点とは異なる視点から世界を見ている主観としてなのである。サルトルは次のような風景から他者の分析を語り出している。

私は公園にいて、芝生やベンチを見ている。と、そこにひとりの男が通りかかる。極めて日常的な風景である。私はもちろんその男を芝生やベンチとは異なった次元でとらえるが、彼を異なった次元に置いているのはその主観性にほかならない。他者を認識するということは、このように私の世界の中へ別の主観性が出現したことを認識するということなのである。では、主観性の出現に関する認識とはいったいどのような認識なのであろうか。サルトルはこの点を次のように分

析している。

他者の出現によって公園の芝生やベンチに客観的な変化が生じるわけではない。それらは他者の出現する以前と何ら変わりない。では、どのような変化が生じるのであろうか。彼と芝生との関係はベンチと芝生との関係とは異なる。後者なら「芝生に沿ってベンチが置かれている」というように外面的な位置関係を指摘すれば足りる。これに対し、彼と芝生との間にはこれとは異なった関係が成立するであろう。なぜなら、彼の出現によって、私の見ているこの芝生は私のパースペクティヴとは異なったパースペクティヴの中に置かれことになるからである。芝生の前にベンチを置いたとしても、それによって生じることは例えば芝生の眺めが遮られるというようなことである。これは基本的に私のパースペクティヴの中での変化にすぎない。しかし、他者の出現という事態はこれとは事情が異なる。新たに出現したパースペクティヴの中では「私の空間性ならざる空間性が繰り広げられる」〔十二〕からである。私は彼のパースペクティヴからものを見ることができないのだから、彼の出現によって、私の目の前に広がる世界は私が見ることのできない次元をもってしまうことになる。この意味で、他者の出現によって世界は私から「逃げ去る」〔十三〕であろう。

「私は他者に対するこの緑の関係を対象的な関係としてとらえるが、私はその緑をそれが他者に現れるようにはとらえることができない。こうして突然、私から世界を奪い去る対象〔他者〕が現れるのである。すべてはもとの場所にあり、すべては今でも私にとって存在しているが、新たな対象〔他者〕の方へ硬直していく見えざる逃亡がすべてに行き渡っているのである。それゆえ、世界の中への他者の出現は、全宇宙の硬直した変容に対応しており、また私が行う世界集中を地底で同時に浸食していく世界分散に対応しているのである」〔十四〕。

このように、サルトルによれば、他者とは私から私の世界を掠めとっていく存在として見出されている。世界に向けられた他者の眼差によって、私の世界は浸食され、私の手から逃れ去っていくのである。

ところで、そもそも私はどうやってそこに主観性の存在を見出したのであろうか。他者の存在に関するサルトルの議論が本格的に展開されるのはここからである。というよりも、他者の主観性が私の世界に及ぼす現実的作用に関する以上の分析は、より根本的な水準で他者を考察するための準備段階であるといってよい。われわれは外的な対象に向けられた他者の眼差に主観性の存在を認めるというのが以上の分析の出発点であった。これから問題にされるのは、では私はどうやってそこに主観性の存在を察知しうるのかという点である。

サルトルは、外的な対象に向けられた眼差から結論づけられる主観性の存在は蓋然的なものにすぎない、という。なぜなら芝生を見ているのはじつはロボットの機械の眼ではないかという懐疑が可能だからである。それゆえ、主観性すなわち他者の存在をわれわれが確信しているのであるとすれば、その確信はいったいどこから得られているのかが問われなければならないであろう。

何かに眼差を向けている対象のもとに主観性の存在を確信するのはどのようにしてなのであろうか。他者の存在を対象知覚の水準で理解する限り、その存在は蓋然性の域を出ない。それでは、その眼差がほかならぬ自己に向けられている場合ならばどうであろうか。その場合には、主観性の存在がもはや懐疑を差し挟みうる余地なしに認められうるのではないか。サルトルの議論が転回するのはこの点においてである。

「もし対象としての他者が、世界とのつながりの中で、私の見ているものを見ている対象として定義されるならば、主観としての他者と私との根本的なつながりは、他者によって見られるという不断の可能性へと帰着させることができなけ

ればならない」（十五）。

では、私の見ているものを見ている存在と、端的に私を見る存在との差異は何であろうか。他者の主観性の存在に関する認識の可能性のすべてはこの問いの中にあるといってよい。

サルトルは、私を見るものとしての他者の存在は確実であるという。言い換えれば、私が主観性の存在を確信するのは他者によって見られるという経験によってである。では、見られるという経験はどうしてそのような確信をもたらしうるのであろうか。これがサルトルの議論を理解するポイントである。外的な対象に向けられた視線のもとに主観性を察知できたとしても、その判断は蓋然的なものであった。その視線はロボットの機械の眼である可能性を排除しえないからである。それなら、自分に向けられた視線からはこの可能性が排除されうるのであろうか。無論、排除しうるのでなければならない。しかしいうまでもなく、なぜそのように考えうるのかが重要である。

サルトルの議論において最も重要な点は、他者によって見られているという意識が「羞恥（honte）」という情動をもたらすという点である。この情動の特質は、もし他者が存在しなければそのような情動は私のうちに発生しえないという点にある。言い換えれば、「羞恥」という情動の意味は、他者によって見られる可能性と決して切り離しえないものなのである。すなわち、「羞恥」という情動には必然的に他者の存在が含意されている。

「実際、誰かが私を見ていると思うのは、私が自分は対象であるという意識を持つからである。しかし、この意識は他者の現実的な存在において、またそれによってでなければ生み出されえないものなのである」（十六）。

その他者はロボットの機械の眼ではない。もしそうなら、「羞恥」など生じないであろう。それゆえ、ロボットの眼を根拠にした懐疑はこの場合には成り立たない。このような論理によって、私が「羞恥」を感じるという経験からただちに他者の存在が結論しうるのである。このように、私が「羞恥」を感じるという経験において他者は現前しており、かつそこに懐疑を差し挟む余地はないということになる。

以上から次の点を指摘しておくことができる。外的な対象に向けられた他者の眼差に、蓋然的にではあれ主観性の存在を察知しうるのはなぜであろうか。その理由はすでに明らかであろう。その眼差は私に向けられる可能性を含んで知覚されているからなのである。「他者によって見られるということが、他者を見るということを真実なものにしているのである」〔十七〕。

他者の超越性

さて、他者の超越性に関するサルトルの主張は、じつは以上の議論の中にすでに含まれている。言い換えれば、他者の存在証明の過程においてその超越性が認められているのである。したがって、以下の論述の目的はこの点をできる限り明白に指摘すること以外にない。

確認のために繰返せば、他者の存在は私が私の経験において確信するものであった。具体的にいえば、私が「羞恥」という情動を経験するとき、そこに他者の存在が確信されるのである。「羞恥」とは、私が誰かに見られているという意識がもたらす情動である。言い換えれば、私が他の主観性にとっての対象となっているという意識によってもたらされるものである。いや、そのような意識それ自体がすでに「羞恥」であるといってよい。しかし、他者の存在がまず確認された上で、その眼差が自分に向けられていることを意識するとそこで「羞恥」が生じるというのではない。「羞恥」を感じる

ことにおいてはじめて他者が現前するのである。それゆえ、私が意識しうるのは自分が誰かに見られているということだけであって、その誰かを対象として認識することはできないであろう。見られるという経験においては、対象として認識されているのは私の方であって、他者はどこまでも私を見る主観性として現前し続けるほかないからである。

こうして、他者の存在は私の経験において与えられるが、同時に私には手の届かない外部として私に与えられるだろう。すなわち、私の世界を超越するものとして。

「私が眼差を向けられていると感じる限りにおいて、世界を超越した他者の存在が私に対して実現するのである」〔十八〕。

このように、他者の存在が蓋然的にではなく確実なものとして経験されるならば、私は他者についてはそれが確実に存在するということ以外に何らの認識をも持つことができないということになる。いかなる手段によってもわれわれはそれに到達することはできない。したがって、他者理解ということを、他者の主観的な意識内容を認識するという意味に解する限り、他者理解など不可能であるといわねばならない。

ところが、「マインド・リーディング」とは他者の主観的な意識内容を推論によって認識しうるという主張である。このような主張は、端的にいえば誤りである。しかし、私の考えによれば、この誤りは他者の超越性に関する全くの無理解に起因しているのではなく、むしろその通俗的な理解の仕方に起因している。すでに指摘した論点をここでもう一度繰返すなら、通俗的理解とは、他者の主観性を推論によってしか認識できない隠された対象として表象する点にある。解読されるべき他者の心とはそのような表象である。無論、ここには決定的な誤解が含まれている。主観性を対象として取り扱うことなどできないからである。何かを対象として認識するということは、〈見られる〉という次元から〈見る〉という

次元へと移行することであるが、他者の主観性は私が〈見られる〉という次元に身を置く限りにおいて現前するものである。〈見る〉という次元に移行したとたん、その主観性は消えてしまうであろう。それゆえ、他者の心とは幻影にすぎないのである。しかし、幻影には用心しなければならない。なぜなら、あらゆる幻影がそうであるようにこの幻影もまた現実的な根拠を持っているからである。この幻影は他者との現実的な関係の中で発生してくるのである。サルトルが明らかにしたのはこの点であるといってよい。それゆえ、ここに論点を定めて引き続きテキストの読解を進めてみなければならないのである。

超越性の下落

「羞恥」とは自己についてのネガティヴな意識である。なぜなら、自己とはおのれの諸可能性へ向けてその存在の所与性を超越していく存在（サルトルのいう対自存在）であるはずだが、すでに触れたように「羞恥」とはおのれが対象として認識されていることについての意識であり、つまりはその所与性を凝固した性質として承認せざるをえないことについての意識だからである。

「純粋な羞恥とは、これこれの咎められるべき対象であるという感情ではなく、一般的にいって対象であるという感情なのであって、つまりは私が他者にとってそうであるところの下落した、依存的な、凝固した存在の中に、自分を認めるという感情なのである」（十九）。

ひと言でいえば、「羞恥」とは、固定した性質を超越するという自己本来のあり方である「自由」が否定されているこ

とについての意識である。だがそうであるとすれば、「羞恥」という情動は、何らかの仕方で乗り越えられなければならないものだということになる。

ではどのようにして私は「羞恥」を乗り越えておのれの自由を回復するというのであろうか。いうまでもなく他者を対象として取り扱うことによってである。

「羞恥に対する反応は、まさに私自身の対象性をつかんでいた者を対象として捕まえることに存している」(二十)。

無論、このように他者を対象として取り扱うとき、他者が私に対して示した超越性は損なわれる。なぜなら、そのとき他者はすでに対象であるにすぎず、もはや純粋な主観性ではありえないからである。他者の超越性とは、他者が主観として私に現前する限りにおいての他者の存在を指すのである。しかし、注意しなければならない点は、このように他者を対象化してしまうことによって、他者の主観性の存在は否定されえないという点である。主観性は否定されるのではなく、それ自体が対象として取り扱われる。ただし、そのように対象として取り扱われた主観性はもはや主観性そのものではない。それは他者という対象が持つひとつの性質に下落している。

「事実、他者が対象として私に現れると、その主観性は、眺められる対象のたんなる性質となる。主観性は下落し、原則としては私の手から逃れる対象的な諸性質の総体として定義される。対象としての他者は、この空箱が「内側」を持っているように、主観性を持っていることなる。こうして、私は私を回復するのである」(二一)。

他者の主観性は、それ自体としては何ら「性質」ではない。それは私に対して現前する他者の存在そのものである。したがって、それが「性質」としてとらえられるということは、すでにその存在が対象の地位へと下落しているということを意味している。では、性質という下落した形態においてとらえられた主観性とはどのようなものなのであろうか。

それこそ「マインド・リーディング」が想定する他者の心、第三者には観察不可能な心理的な内面である。それは第三者の眼からはひとまず隠されている。しかし、推論という手段によれば私はその隠された心の状態を読み取ることができる。上の引用文でサルトルが「原則としては私の手から逃れる」という表現によって指しているのはこの点である。

このように、他者の心、言い換えればその心理的な内面なるものは、他者との現実的な関係の中で生み出されている。他者から見られているという「羞恥」の感情が、他者に心理的な内面を想定するようわれわれを強いるのである。しかし、そのようなものが幻影であることに変わりはない。実際には、箱の内側が存在するのと同じように他者の心理的な内面が存在するわけではないのである。そうであるとすれば、「マインド・リーディング」とは存在しない対象を読み取ることである。いや、というより、「マインド・リーディング」など現実には行われてはいないのである。

ところが、他者理解は現実に行われていることである。それが「マインド・リーディング」によって行われているのではないという以上の結論は、他者理解に関する別の考察を要求するであろう。主観としての他者は私の認識を超越している。私が認識できるのは対象としての他者にすぎないが、心理的な内面という対象は現実に存在するものではない。すると、残された可能性は他者の身体という対象だけである。したがって、現実的な他者理解は他者の身体の知覚という水準で考察されなければならないであろう。

3　知覚による他者理解

身体の意味

他者理解に関するサルトルの主張をひと言で要約すれば、それは次のようなものになるであろう。状況の中で他者の身体が持つ「意味」を知覚的に把握することがその心的作用を理解することである、と。他者を理解するときの対象はその身体であるが、しかしそれが他者理解である以上たんなる身体動作の理解であることはできない。すなわち「彼はベンチに座っている」とか「彼は牛肉を食べている」というような理解がここで問題になっているのではない。むしろ、感情、意図等の心的作用に関する理解こそ本来の意味での他者理解であり、サルトルもそれを問題にしているのである。ただし、そのために、身体の背後に、推論によって解読されるべき心を想定していないだけである。むしろ、サルトルはそのような想定が誤りであるという認識から出発するのである。

「身体の背後には何ものも存在しない。むしろ身体は全体として心的である」(二二)。

他者理解は推論ではなく知覚によるものである。推論されるべき隠された対象など存在しないからである。

「心的対象は全面的に知覚に引き渡されている」(二三)。

無論、心的作用は身体そのものの知覚とは水準が異なる。心的作用とは、身体が具体的な状況の中で知覚されるときに

持つことになる「意味」だからである。感情、意図等は、身体の背後に隠された心の状態ではなく身体そのものが帯びる「意味」なのである。

「他者の身体とは何かを意味するもの（signifiant）である」〔二四〕。

このようなサルトルの主張の中にライルの「カテゴリー・ミステイク」の議論と同じ視点を認めることは困難ではあるまい。心的作用を「意味」の次元で理解するということはそれらを身体そのものとは異なったカテゴリーにおいて理解するということだからである。しかし、サルトルとライルの共通点を指摘することは大して重要な点ではない。むしろ、心的作用は身体の表面に現れる「意味」として理解されるというサルトルの主張を、他者の超越性に関する主張と明確に関連づけて理解することが重要である。なぜなら、私に眼差を向ける存在としてでなければ他者は私にとって現前せず、それゆえ目の前に知覚される身体をほかならぬ他者の身体として知覚することは、この前提なしには成立しえないと考えられるからである。

「こういってよければ、他者はまず私にとって存在する。そしてその次に、私は他者をその身体において把握する。他者の身体は私にとっては二次的な構造である」〔二五〕。

他者とは何よりもまず主観性を意味する。私は他者が主観的に経験する世界をそのまま経験することはできない。それは他者の経験であって私の経験ではないからである。この意味では他者とは私の経験しうる世界の外部である。私は他者

の主観を私の世界の内部で理解することはできない。

これに対して、他者の身体とは、私が私の世界の内部で対象として知覚する存在である。無論、身体という対象がその他の対象とは異なった仕方で知覚されていることは明白であろう。このような差異は主観としての他者を前提しかつそれによって支えられている。主観としての他者は私の世界とは異なった世界における中心であった。そうであれば、他者の身体もまた別の意味においてひとつの中心として知覚されるであろう。主観としての他者が世界を構成する中心であったとすれば、私が知覚する他者の身体は私の世界の中に存在する様々な事物が指示する中心である。他者の身体は様々な事物の連関の中でのみ、言い換えれば状況の中でのみ知覚されるのである。他者の身体はこれ以外の仕方では私にとって存在しえない。

「他者は、根源的に、状況の中にある身体として私に与えられる」〔二六〕。

身体がつねに状況の中にあるということは、それがつねに何らかの意味を持っているということである。そのような意味を持つことなしには身体は現れることができないであろう。

「実際、身体はそこに存在するものの全体とともに有意味な諸関係を支えることなしには現れることができない」〔二七〕。

例えば、彼がカフェに入ってきてテーブルにつく。彼は鞄からノートとペンを取出す。飲み物を注文し、タバコに火をつける。これはサルトルの文体を真似て私が作った例である。そしてこの例では、彼の身体はテーブル、ノート、ペン、

タバコ等々の事物との関係の中で知覚されていることになっている。さて、それらの事物との関係から、彼が何か書き物をするためにカフェにやってきたということは容易に理解されよう。彼の身体はそのような意味から離れては現れえない。また、何か書き物をしようという彼の意図さえも、このような状況の中にある彼の身体を離れては現れえないであろう。しかし、彼の意図はそのような状況にもとづいて推論されているのではない、という点に注意すべきである。むしろ、彼の意図もまた状況の中に知覚されていると考えなければならないであろう。なぜなら、彼の意図の理解が推論にもとづくと主張するには、彼の意図を隠された心の状態とみなすという点が前提されていなければならないが、そのようなものを想定すること自体がすでに誤りとして退けられているからである。「意味は、神秘的な心的作用を指し示すものではない」〔二八〕のである。

このように、身体はつねに状況の中にあり、他の諸事物との関係において意味を持っている。そして、感情、意図等が持っている意味も当然その中に含まれているのでなければならないのである。

感情および意図

この点の重要性を確認するために、サルトルが具体例によってこの主張を敷衍しているテキストを参照しよう。重要な論点は、感情、意図等を言い表す語彙は、隠された心の状態を指示するものではなく、むしろ状況の中で身体が取る態度を指示しているという点である。

サルトルによれば、感情は知覚されえない心の変化を間接的に表出するものではなく、具体的な状況の中で身体が取る態度それ自体である。

「特に様々な情動的仕草、あるいはより一般的にいえば、不当にも表出と呼ばれている諸現象は、心理学者の研究の非物質的な対象となるような何らかの心理によって経験される、隠された状態をわれわれに表示しているのでは全くない」(二九)。

この考えにしたがえば、例えば「怒り」という語は身体の背後にある心的状態を指示しているのではない。では、いったい何を指示しているのであろうか。状況に対する身体の態度それ自体である。相手に怒鳴っている男を見れば彼が怒っていることは容易に理解できるであろう。しかし、われわれは怒鳴るという行為をまず観察し、しかる後に怒りという隠された心的状態を推論しているのではない。怒鳴っている男を状況の中で知覚するということそれ自体が、その行為が怒りという意味を持っていることを理解させるのである。ウィトゲンシュタインならば、われわれは怒りを「見る」と、端的に表現したであろう(三十)。基本的にはサルトルの主張もそれと同一である。

「怒りは、世界の中でなされる行為(例えば、人を殴る、罵る等々)以外の何ものも、すなわち身体の新たな有意味的態度以外の何ものをも指示しないのである」(三一)。

もっとも、他者に関してわれわれは思い違いをするということがありうるであろう。われわれがこれらを知覚によって把握しているのであれば、そのような思い違いは起こりえないのではなかろうか。むしろ、他者を理解する際にわれわれがしばしば思い違いをするという事実は、他者理解がやはり隠れた心理状態を推論することによって行われているということの証拠となるのではなかろうか。サルトルの主張に対してこのような疑念が生じてくるのは当然であろう。

実際、感情はさておき、他者の意図については、われわれはしばしば思い違いをすることがある。すると、やはりこれらは知覚には隠された内的な心理に属するものだということにならないであろうか。この点を肯定することによって「マインド・リーディング」という考えが成立していることはいうまでもない。この立場からすれば、他者理解とはまさに隠された内的状態として意図や信念を推論することによって遂行されるものなのである。推論の方式が「心の理論」によるか「シミュレーション」によるかという対立はあるにせよ、他者理解が推論を介した間接的な行為であるという主張は誤解の可能性を説明しうるのである。すなわち、あらゆる誤解と同じように他者に関する誤解もまた推論の失敗にほかならない。「偽信念課題」が発達心理学において特権化されてきた理由もじつはこの点に存している。

そこで次に、意図に関するサルトルの主張を参照してみなければならない。サルトルの考えにしたがえば、意図もまた状況の中で身体が帯びる意味に他ならない。上の例で見ておいたように、カフェのテーブルについてノートとペンを取出す客を見たとすれば、彼は何か書き物をするという意図でカフェにやってきたのだとわれわれは理解するであろう。しかし、この理解は誤解に終わる可能性を持っている。彼は、そのノートとペンを友達に返すためにカフェで待ち合わせをしているだけかもしれないのである。知覚による意図の理解という主張はこのような誤解の可能性を説明しうるであろうか。

サルトルによれば、意図に関する誤解の理由を推論の失敗に帰することはできない。なぜなら、そのような考えは、他者理解が他者の内的な心の状態の理解であるという点を大前提にしているが、この大前提それ自体が誤っていると考えられるからである。

「私が他者の意図について誤るのは、私が彼の所作を手の届かないところにある主観性に結びつけるからでは全くない」〔三二〕。

では、それはどのように説明されうるのであろうか。それはたんなる知覚の誤りである。繰返していえば、彼の身体は具体的な状況の中で特定の意図を持つものとして知覚される。ところが、その状況を作り出している要素は多数にのぼるであろうし、それらの関係も複雑である。したがって、どのような状況であれその全体をくまなく知覚することは不可能であって、見落としが生じることの方が自然である。意図についての誤解は、このような状況知覚の不完全さによって説明されうるであろう。

「私が他者の意図について誤るのは、世界が実際に組織されているのとは違った仕方で、私が彼の所作のまわりに世界を組織するからなのである」(三三)。

このように、意図についての誤解は、他者の内的な心の状態についての誤解ではなく、むしろ世界についての誤解なのである。いや、世界についてのわれわれの無知が、彼の意図の誤解という点に集約されて現れているのである。

「マインド・リーディング」を否定することによって採用されるのは、以上のような知覚による他者理解の理論である。この理論に現実性があるとすれば、その現実性は他者理解を世界の理解というより広い文脈の中で考察するという発想に起因するものなのである。

おわりに

「マインド・リーディング」の理論には他者の存在に関する議論が欠落している。他者の存在は始めから前提された上で、さてその心をいかにして読みうるかが問題になっているのである。この理論が哲学というよりもむしろ心理学の分野を中心に議論されているのもそのような理由からであると考えられる。そこで、他者の存在そのものから問い始めると、次の点が明瞭になるであろう。すなわち、他者の存在とは何よりも主観性の存在にほかならないという点である。それゆえ、他者理解の理論の基礎には主観性に関する理解が置かれなければならないであろう。ところで、他者の主観性を検討するなら、その超越性が視野に入ってこざるをえない。そしてその徹底した超越性を認めれば、「マインド・リーディング」が前提する心の状態というものは幻影であるという視点が成立する。ところが事実として他者理解は成立している。それはきわめて日常的な現象である。この現象を「マインド・リーディング」によらずに説明しようとすれば、残された方策は知覚による他者理解しかないことになる。

以上の考察の目的は、サルトルの他者論をこのような全体的な構造のもとに理解することであった。そのよりどころとして「マインド・リーディング」という考えを虚偽として批判するという構成が採用されたのである。私が明瞭にしたかった論点は、具体的な状況の中での全面的に知覚による他者理解というサルトルの主張が他者の超越性に関する形而上学的な理解を背景にして展開されているという論理構造である〔三四〕。その考察の結論として次のように指摘することができよう。他者という問題は基本的に形而上学を要求しており、認知の理論のみでは担いきれない。そしてこの点を重視するならば、他者という問題においてはいわば形而上学の復権が承認されなければならないのである。

注

（一）他者理解に関する問題は、いっけん両立しえない二つの側面から成っている。重要な点はこれら二つの側面が両立する構造を指摘することである。例えば、すでに次のような指摘がなされている。「他者の心に関する問題が繰返し問われるひとつの理由は、他者の心的生活に接近することができるかどうかという点に関して、われわれが対立する直観を抱いているということである。一方で、他者の感情や思考は彼らの表情や所作の中に明白に現れているという主張には正しい点がある。他方で、他人の心的生活はある意味においては接近不可能であるという考えにも、やはり正しい点があるように思われるのである。他者が怒っていること、痛みを感じていること、あるいは退屈していることを疑う理由が何もない状況というものが存在するし、他者の正確な心の状態を知るのに何の手がかりもないという状況も存在するのである。とはいえ、他者の心的生活は本質的に接近不可能であると主張することは、すべてが透明に見えていると主張することが誤っているのと同じく、誤っているように思われる。これらの直観の一方のみを認めるのではなく、その両方をまとめあげることが要求されるのである」。Gallagher & Zahavi, p.186

（二）「理論理論」と「シミュレーション理論」に共通する姿勢は次のように定式化されるであろう。「理論理論（TT）とシミュレーション理論（ST）の標準的な見解においては、他者理解という問題は他者の心に接近する問題として枠組みを与えられている。他者の心は隠されており、それゆえ知覚によっては接近できないという点がまさに想定されているのである。私はあなたの心を見ることはできない。それゆえ知覚によって提供された証拠にもとづき、そこに何があるのかを推論するための方法を私は考案しなければならない、というわけである」。Gallagher, p.536

（三）Premack & Woodruff, p.515

（四）「偽信念課題」には複数のヴァージョンが存在するが、ここではBaron-Cohen et al. によるヴァージョンを簡略化して用いている。このヴァージョンは二人の登場人物（人形）にちなんで通称「サリー・アン課題（Sally-Anne task）」と呼ばれているものである。より複雑な課題は Wimmer & Perner のものである。なお、Premack & Woodruffの前掲論文がきっかけになってこの課題が考案され、「理論理論」と「シミュレーション理論」論争の必須アイテムとなった経緯については、Davies &

Stone, pp.2-6の簡便なまとめを参照。

（五）Goldman, p.18

（六）Goldmanによれば、「この論文は現代のシミュレーション理論の発展の転回点となるものであった」。*ibid*., p.19

（七）Gordon, pp.69-70

（八）*ibid*., p.70

（九）Ryle, p.17

（十）*ibid*., p.23, p.26

（十一）*ibid*., p.23

（十二）Sartre, p.294

（十三）*ibid*., p.294

（十四）*ibid*., pp.294-295

（十五）*ibid*., p.296

（十六）*ibid*., p.310

（十七）*ibid*., p.296

（十八）*ibid*., p.309

（十九）*ibid*., p.328

（二十）*ibid*., p.328

（二一）*ibid*., p.328

（二二）*ibid*., p.345

（二三）*ibid*., p.387

（二四）*ibid*., p.384

(二五) *ibid.*, p.379

(二六) *ibid.*, p.384

(二七) *ibid.*, p.385

(二八) *ibid.*, p.386

(二九) *ibid.*, p.387

(三十)「われわれは感情を見るのだ」。Wittgenstein, vol.II, 570

(三一) Sartre, p.387

(三二) *ibid.*, p.332

(三三) *ibid.*, p.332

(三四) Gallagher が主張する「直接知覚（direct perception）」による他者理解の理論はサルトルの理論に極めて類似している。ただし他者の超越性に関する形而上学は共有されていない。前者については例えば次のような論述がある。「状況の中に存在する行為者（situated agent）、すなわちその人が今何をしており、また何を考えているかをわれわれに教えてくれるものでもある周囲の状態の中に置かれている行為者を知覚することを通してえられる、それだけですでに豊富かつ複雑な理解よりもわれわれが先に進む必要は、通常は存在しない」。p.540

文献

Baron-Cohen, S, Leslie, A.M., Frith, U., 1985, "Does the autistic child have a "theory of mind"?," *Cognition*, 21

Davies, M., Stone, T.(eds), 1995, *Folk Psychology*, Blackwell

Gallagher, S, 2008, "Direct perception in the intersubjective context," *Consciousness and Cognition*, 17

Gallagher, S, Zahavi, D., 2008, *Phenomenological Mind: an introduction to philosophy of mind and cognitive science*, Routledge

Goldman, A., 2006, *Simulating Minds: the philosophy, psychology, and neuroscience of mindreading*, Oxford

Gordon, R.M., 1986, "Folk Psychology as Simulation," Davies, M., Stone, T.(eds), 1995, *Folk Psychology*, Blackwell

Premack, D., Woodruff, G., 1978, "Does the chimpanzee have a theory of mind?," *The Behavioral and Brain Sciences*, 4

Ryle, G., 1949/2000, *The Concept of Mind*, Penguin Classics

Sartre, J.-P., 1943 *L'Etre et le Néant: essai d'une ontology phénoménologique*, Gallimard

Wimmer, H., Perner, J., 1983, "Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception," *Cognition*, 13

Wittgenstein, L., 1980, *Remarks on the Philosophy of Psychology*, The University of Chicago Press